

氏 名	蘇 明 明
学位(専攻分野)	博 士 (人間・環境学)
学 位 記 番 号	人 博 第 314 号
学位授与の日付	平成 18 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	人 間 ・ 環 境 学 研 究 科 文 化 ・ 地 域 環 境 学 専 攻
学位論文題目	唐代の文人と喫茶 ——唐詩を中心に考察する

論文調査委員 (主 査) 教授 松 浦 茂 助教授 赤 松 紀 彦 助教授 道 坂 昭 廣

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、中国において古くから極めて精神性の高い文化として意識されてきた喫茶文化について、その大きな担い手であった文人層に焦点をあてつつ、彼らが残した文学作品を主な資料にしながら、喫茶という行為がいつ頃からどのように文学作品の対象となってきたか、そして彼らの精神生活とどのように関わってきたかを考察したものである。

まず、序論において本論文でいう「文人」について定義し、また各章と大きく関わる喫茶法の歴史的変遷について概説している。

前編第一章では、南北朝までの時期の茶にまつわる資料をたんねんに読み解きながら、その中で、茶を主題とした最古の文学作品である四世紀初め、西晋末の杜育『荈賦』について、現存するのはその断片ではあるものの、それが喫茶という行為の中に高い精神性を見いだそうとする点で、のちの喫茶文学の濫觴として位置づけられることを明らかにした。それとともに、以後唐代の半ばに至るまでの三世紀以上にわたり、茶を主題とした文学作品は跡を断ってしまうことを指摘している。

続く第二章は、唐代における茶業の発展と喫茶の普及ならびに茶詩、すなわち茶を主題とした詩の特徴について概説した部分である。申請者は、茶が本格的に作られることとなる唐代の半ば以降を、盛唐期、中唐初期（大暦年間前後）、中晩唐期（五代を含む）という三つの時期に分けて、喫茶と茶詩の特徴について述べる。そして盛唐期までの喫茶の風習が、多くは、寺院という限られた場でのものであり、それが茶詩における描写にも大きく影響したとしている。

前編の中心といえるのが、第三章、第四章である。第三章は、盛唐期の喫茶と茶詩について述べる。この時期喫茶の方法に変化が起り、それまでは他の薬草と混ぜて飲むものであったお茶をそれだけで味わうようになった。ただしそれも禅寺の僧など一部のみに止まっており、王維を除けば盛唐時期の詩人たちは茶詩をほとんど残さなかったことを指摘している。

第四章では、中唐初期の喫茶習慣の拡大と茶詩の変容について述べる。この時期には陸羽『茶経』という、喫茶について論じた最大の古典が生まれると同時に、文人たちの間に高雅な文化として喫茶が意識され、詩会、茶会といった共同の場の中から、新たなスタイルの茶詩が生まれてきたことを明らかにした。さらに『茶経』は、喫茶という行為に高い精神性を賦与したものであったが、その背景にあったのは、当時の社会を大きく揺るがした安史の乱を避けて江南に逃れた知識人たちが、精神的な安らぎを求めて隠逸を志向したという点であるとしている。

後篇の四章は、前篇で論じた大きな流れの中での個別的な問題について論じている。まず第一章は「唐詩の中の名茶」と題されているが、「名茶」という言葉自体、既に四世紀半ばに著された中国最古の地誌である『華陽国志』に見えるものであり、喫茶文化の成立とともに生まれた表現であった。この章では、蜀や江南といった地域別に、唐詩に現れる名茶について、細かな分析を加えている。

第二章では、唐代における喫茶に対する美的心情について、『茶経』に見える記述と唐詩の諸作品の中に見られる表現を照らし合わせながら、考察したものである。茶摘み、製茶、茶の点て方から水、燃料まで各種の表現を取り上げて、当時の人々が喫茶という営為の中に求めようとした美意識に迫ったものである。

第三章は、ふたたび詩人と喫茶の関わりを論じたものであり、ここでは陸羽とも親交のあった中唐期の詩僧、皎然が取りあげられている。皎然は二十首に及ぶ茶詩を残しているが、陸羽との交遊がどのようなものであったか、当時の文人たちとの交遊の中でどのようにしてその茶詩が生み出されていったのか、そして彼による「茶道」という言葉の創出について考察している。

論文の最終章は、唐代の文化を積極的に受容した平安前期の漢詩の中で、喫茶がどのような姿で描かれているかについての考察である。喫茶の文化は、以後我が国でも独自の発展を遂げるが、この章ではその初期の段階について、喫茶の持つ精神性という点を中心に考察している。

論文審査の結果の要旨

この論文は、中国における喫茶の風習と文人たちとの関わりを、彼らが残した詩を通じて明らかにしようとしたものである。中国における茶の歴史はたいへん古く、遅くとも前漢末には蜀の地域（現在の四川省）で、すでに商品化されていたという記録がある。このように喫茶の風習はきわめて長い歴史を持つものであるが、申請者はそのうちの魏晋以降から唐代に至る時期に、文人たちが残した詩の中で喫茶がどのようにとりあげられてきたか、という点に着目して研究を行っている。

喫茶は、きわめて日常的な行為であるとともに、古くから高い精神性をもつ文化として意識されてきた。そして一方ではまた、茶は経済的にも政治的にもきわめて重要な産物であることから、歴代の王朝はその生産と交易を重視した。こうしたことから、中国でも日本でも、茶についてはこれまで文化史、政治史、経済史研究の大きなテーマと考えられ、さまざまな研究がなされてきた。

そうした先行研究の成果をふまえた上で、申請者が新たな視点から考察を試みようとしたのがこの論文である。すなわち、唐代までの文学作品から、茶に関する表現をたねんにひろいあげ、その作者たちが喫茶とどのように関わり、そしてどのように表現したか、その表現の中にはどのような思想、感情、あるいは美意識といったものがこめられているのかを一つ一つ明らかにしようとした。

最も注目される論点は、以下の通りである。

1) 盛唐から中唐にかけての時代を境にして、喫茶法は他の薬草類を混ぜて飲むスタイルから、茶だけを飲料とするというスタイルへと変化した。そうした中で陸羽の『茶経』が現れ、さらには皎然ら詩人たちが、茶を詩の題材として正面から取りあげようとする作品を作り出したと述べる。すなわち、この段階に至って、はじめて喫茶は文学の題材たり得るという明確な意識のもとに、かずかずの詩が生み出されたことを論証した。

2) さらに、陸羽の『茶経』、皎然らによる「茶詩」が生み出された背景には、文人たちの間で、喫茶が新しい、高い精神性を備えた文化として認知されるとともに、かれらによって詩会、茶会といった共同の場がもたれたことがあることを論証しようとした。このような文学の場では、聯句と呼ばれる詩体をその代表とする、新たな文学意識をもった文学作品が創造されたが、申請者は茶が聯句の新しい題材として登場した事実に着目した。

3) また、西晋の杜育が作った『荈賦』はその断片しか伝わらず、そもそも「荈」そのものが果たして茶を意味するのかが問題とされてきた。申請者はこれが茶であることを考証し、これまで看過されてきたこの作品が、喫茶という行為が持つ精神性を表現しようとする作品の濫觴をなすものであることを論証した。以上がとくに評価できる点である。

申請者の論証の中心は上記の点に集約されるが、同時に唐詩に表れる「名茶」について、その生産地別に細かな分析を試み、また『茶経』に見える記述と唐詩の中に見られる表現を対比しながら、茶摘み、製茶、茶の点て方、水、燃料、用具に至るまでさまざまな事柄について、彼らが喫茶に求めた美意識に迫ろうとするなど、喫茶の文化としてのあり方をさまざまな角度から明らかにすることも、怠っていない。

本論文は、喫茶の文化史に関する研究において、必ずしも重視されて来なかった、唐詩における文学的表現の背景にあるものを、実証的に示そうとする意欲作であり、そうした点でこれまでの研究と一線を画するきわめて重要な論文であると評価できる。

以上によって本申請論文は、文化の普遍性と個別性の問題に焦点をあてて、様々な地域環境における文化の歴史と可能性について研究することを目的とする文化・地域環境学専攻にふさわしい内容を備えたものと言える。

よって本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また平成18年1月25日，論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果，合格と認めた。